

● CNC P はあなたが参加し楽しく議論し活動する場です ●

シリーズ「土木ということば」

第 5 回謡曲、浄瑠璃の「土木」

日本最大（項目数 50 万、用例数 100 万）の国語辞典に“ど - ぼく【土木】〔名〕（古くは「とぼく」とも）(1)土と木。比喩的に、飾らない粗野で素朴なものをもいう。→形骸（けいがい）を土木にす。*大観本謡曲・谷行〔1546 頃〕「谷行に飛びかけて、上に蓋へる土木盤石、押し倒し取り払って*浄瑠璃・曾我扇八景〔1711 頃〕上「内に土木の気をやしなひて、外青黄の色なく」……”（日本国語大辞典第二版、小学館、2000～2002 年）とある。

この用例が「土木」を「土と木」と説明する根拠とされる室町末期の謡曲『谷行（作者不詳）』と江戸前期の浄瑠璃『曾我扇八景（近松門左衛門）』である。

口伝とされる能楽を書写した謡本（謡曲の稽古用譜本）の初期は平仮名書きで、観世流宗家 9 世与三郎忠親の天正 17 年（1589 年）の自筆謡本（観世アーカイブ）には「とうぼくはんじやく」とあり、金春流鳥養道晰の同時期の謡本（吉川家旧蔵車屋本）には「とうぼくばんじやく」とある。漢字表記は元禄（1688 年）の頃からで、「渡木盤石」「とうぼく盤石」「土木はんじやく」「土木盤石」「倒木盤石」など明治期に至るまで表記の揺れが多く存在する。

浄瑠璃『曾我扇八景』は主題の「鶴」を説明する枕（導入部）に中国明代の『相鶴經（周履靖）』の「所以體無青黄二色者、土木之氣内養、故不表於外也」を引用して、五行思想の木、土と五色の青、黄を対応させた単なる修辞である。

二つの用例とも「土と木」を第一と説明するには不十分と考えるがいかがか。

（土木学会土木広報センター次長 小松 淳）

Vol.53 コンテンツ

巻頭言	日本の地方に暮らす	福林 良典	2
コラム	土木と人工知能（AI）	花村 義久	3
トピックス	アセットマネジメントを自治体行政に活かすには	有岡 正樹	5
会員紹介	電線のない街づくり支援ネットワーク		7
部門活動紹介	CNCP アワード「市民社会を築く建設大賞 2018」受賞者決定	三上 靖彦	8
シドニー視察旅行記（10）	NSW 州道路局とのワークショップ	有岡 正樹	9
サポーターからの投稿	土木の連携に思うこと	原 諭	11
事務局通信			12

